

ブラジル・ノロエステ地方における 日本語新聞の果たした役割

半澤典子

I はじめに

戦前期、日本人ブラジル移民たちは、伝達手段としての日本語新聞を発行又は購読する行為を通して、移民としての意識を変革させ、該社会を変容させ、その評価を変化させてきた。日本語放送など存在しなかった初期移民社会において、新聞はもっとも重要なメディアの伝達手段であったばかりでなく、伝達機能としての俊敏性・正確性・公平性、隠蔽性をも兼ね備えることで、新たな人間の意識や移民社会を構築する際のメディアそのものであった¹⁾。

本研究では、戦前期ブラジルサンパウロ州ノロエステ地方に焦点を当て、1920年代のノロエステ地方に活動拠点があった日本語新聞『聖州新報』を視座に置きつつ、1910年代よりサンパウロ市に拠点を置いていた『日伯新聞』及び『伯刺西爾時報』などの特性を踏まえ、当時の主要日本語新聞が情報をどのような立場で報道し、初期日本人移民社会にどのような影響をもたらし、その社会を変容させたか等について考察する。

II なぜノロエステなのか：日本人移民と日本語新聞創刊

初期移民にとって日本の対蹠点に位置するブラジルでは、気候や土壌の相違、ブラジル国内情勢・言語・生活習慣の不理解、母国日本の情報欠如等が異国に暮らす中での精神的不安材料そのものであった。そのような中で最も身近な日本語媒体物は新聞であった。

サンパウロ州に於ける初期の日本人移民は、珈琲園労働者（コロノ）としての入植をその前提とした。珈琲園の発展は19世紀末以来、サンパウロ市を起点に主要鉄道沿線に展開した。すなわち、セントラル線沿線から始まり、モジアナ線、パウリスタ線、アララクワラ線、ノロエステ線さらにソロカバナ線沿線へと、時計とは逆回りにサンパウロ州内に拡散していた（図1参照）。コロノとしての入植は、州東部から北部の主としてセントラル線からアララクワラ線沿線が中心であった。1910年代半ば頃から州北西部のノロエステ線沿線に、コロノからの脱却を図り借地農や独立自営農を目指す人々が集住するようになった。彼らにとって移動地域やその周辺地域の土地情報や日本人の活動情報は重要となり、土地売買情報や移民生活関連情報を内包した記事の掲載された新聞を求めている。結果、所謂政論紙よりコミュニティ紙の性格の強い新聞が創刊されるようになった²⁾。

ノロエステ地方とは、現在のバウルー以西、パラナ川河岸までの一帯を指すが、1910年代のノロエステ地方では、バウルーからアラサツバに至る一帯が、日本人移民がコロノから借地農や独立自営農民に転換する過程で入植した地域となる。ノロエステ地方の玄関口であったバ



図1 サンパウロ州の開拓鉄道（1933年当時）

伯刺西爾時報社（1933年）『ブラジル在留邦人分布図』、氏原彦馬（1932年頃）『北パラナ英国シンジケートの土地図』などより作成

ウルーは、サンパウロ市から約320km程北西に位置し、ノロエステ線、パウリスタ線、ソロカバナ線等の開拓鉄道の発着地として栄えていた。すなわち当時のパウルーは、サンパウロ方面からノロエステ地方へ、さらにはパラナ川以西のマットグROSS地方から国境を越えてボリビアへ、南部はパラナ州へ、北部は当時米作の盛んだったミナスジェライス州米作三角地帯へと通じる文化・経済活動の結節点（ハブ）であったのだ。

1923年の「通商公報」によれば、サンパウロ州に於ける日本人農場主の保有農場は1,167地点で、全サンパウロの農場数79,196の1.5%、農場面積は全サンパウロの農場面積10,748,987haの僅か0.4%に過ぎない43,239haであった³⁾。また、1923年7月6日の『聖報』によれば、当時の在伯同胞総数約4万人、約8,000家族の3分の1が独立自営農民で、残りが借地農と珈琲園労働者で折半していたという⁴⁾。この事に関しては、外務省『別冊伯国之部 本邦移民ニ関スル外国官民ノ言動並新聞論調』の中で、ブラジルのエスタード紙に掲載された南亜米利加通商局長赤松談話として「日本移民総数ハ四万人ヲ超ヘサルベシ」とあることから根拠づけられる⁵⁾。すなわち、ブラジルに移民して15年足らずの日本人移民の農業状況は、農場数・農場面積ともに少なく、農業基盤が確立していたとは言い難かったのである。

1924年当時のノロエステの日本人人口は、3705家族19188人、地主1131人であった⁶⁾。さらに1932年8月当時のサンパウロ州内在伯邦人総人口は、121,148人（男:64552人、女:56596人）で、うち、ノロエステ鉄道沿線人口は48,372人、ソロカバナ線沿線人口は18,408人、パウリスタ線沿線は10,799人などとなっており、ノロエステ鉄道沿線に在ブラジル日本人移民が最も多いことがわかる（表1参照）。彼らの生業はノロエステ線では珈琲栽培、ソロカバナ線やパウリスタ線沿線では棉花生産が他地域より卓越していた⁷⁾。着実に拡大発展しつつあったノロエステ地方の実態が新聞の需要を増大させ、日本語新聞各社による購読者獲得競争を高めた要因の一つとなったのである。

表1 サンパウロ州内在伯邦人概況（1932年）

	在伯邦人数（人）		所有地面積 アルケーレス	所有珈琲樹数 本	棉花生産高 アローバ
	男	女			
ノロエステ線	25731	22641	44,956	36,085,850	199,443
ソコカバナ線	9805	8603	23,021	11,073,335	749,792
パウリスタ線	5745	5054	8,873	3,513,900	313,046
その他	23271	20298	12,109	4,793,215	328,184
合計	64552	56596	99,421	55,466,300	1,620,465
	121,148				

聖州新報社編『在伯日本人移植民25周年記念鑑』同社発行1933年、各線別所統計表より抜粋。
所有地面積及び所有地珈琲樹数は個人所有に係るもので、日本の資本家其の他団体の所有するものは含まない。

アルケール：ブラジルの農地面積単位、州によって多少異なる、サンパウロ州では1アルケール=2.4ha、
アローバ：サンパウロ州重量単位、1アローバ=15kg

Ⅲ 1910年～1930年代のサンパウロ州に於ける主要日本語新聞

－『日伯新聞』、『伯刺西爾時報』と『聖州新報』－

1. 主要日本語新聞とその特性

ブラジルに於ける日本語新聞の創刊は、1910年代半ばから始まった。コロノから独立自営農民への転換期に当たる1916年1月には、早くも星名謙一郎と鹿野久一郎の共同による週刊『南米』が発刊された。発行地はサンパウロ市であったが、その内容は、自己の所有するソコカバナ線奥地の土地分譲広告を主としたコミュニティ紙で、1918年12月までの刊行という短命に終わった。現存するのは、1918年1月12日（第103号）～1918年12月24日（第150号）までと云われている⁸⁾。

週刊『南米』創刊以後、『日伯新聞』（1916年）、『伯刺西爾時報』（1917年）、『聖州新報』（1921年）等、次々と日本語新聞がサンパウロ市のみならず地方都市に仄々の声を上げた⁹⁾。『南米新報』（1928年）、『アリアンサ時報』（1930年）、『日本新聞』（1932年）、『北西民報』（1934年）等がそれで、『アリアンサ時報』と『北西民報』はノロエステ地方で創刊されている¹⁰⁾。とは言えノロエステ地方における主要紙は『日伯新聞』及び『伯刺西爾時報』、『聖州新報』であった。以下、この3紙についてその特性を述べることにする。

(1) 『日伯新聞』

1916年8月31日の天長節を機に、金子保三郎による『日伯新聞』が、元『ロッキー時報』記者であったアメリカからの再移住者輪湖俊午郎との共同で創刊された¹¹⁾。しかし、輪湖は、金子との意見の相違から1年足らずで金子と別れ、『日伯』は日本人のブラジル定着を前提とした金子の考えを根底に置くようになった。「邦字新聞はブラジル邦人に目と口を与えるもの」を社是として、サンパウロ市エルネスト・デ・カストロ街に拠点を置き、領事館情報を中心とした

移民生活を報道することにその特色を見出していたが、発刊当初は石版刷りであった¹²⁾。社主の金子は体調不全と印刷技術向上に関わる資金造りの為一旦帰国したが、念願叶わず1919年9月、三浦鑿造にその全てを売却した¹³⁾。三浦は政論紙の報道に長け、帝国政府批判を強めたばかりでなく、民衆の醜態を記述して、却って良識ある民衆から反感を買うようなことを平然とやってのけていた。この公私を問わず歯に衣着せぬ政論、コミュニティ論は、移民の目線以上の視点を持ち、時に報道の公正性、信憑性が懸念されるような記事を掲載した為、購読者や記事内容該当者、特に母国関係者など公人からの疑心暗鬼を生じさせ、1931年と1939年の2回、帝国政府及ブラジル政府からも国外追放の憂き目にあわされた。結果、再追放を機に『日伯』は廃刊となった。現存する最古の新聞は、1924年2月22日(第361号)のもので、6ページ7段組みの活字版であった。しかし、創刊時から1919年11月14日までは石版刷りで、その後ルビなし活字版となった。活字版になってからの購読料は年間18ミル前払い制で、他の2社に比べてやや割高であった。創刊当初は週1回金曜日に発刊していた。現存する最古紙の一面記事は、三浦による「同朋自決」と題した政論で、「日本移民が渡伯以来十有七年、移民政策の成績は上がり。移民奨励など政府の眼中にはない。」との鋭い報道をしている。歯に衣着せぬ報道姿勢は、厳しく余裕のない生活を強いられていた移民達や都市の知識人たちから支持され、日本移民25周年に当たる1933年当時の発行部数は約7000部で、ノロエステ地方に多くの購読者を抱えていたようだ。1936年4月から週3回発行、1937年8月には『聖報』や『時報』に一步遅れを取って日刊紙に移行している。1939年5月27日(第1716号)をもって廃刊となったが、この背景には社主三浦鑿の国外追放事件が関与していたことは誰もが認める処となっている。

日本人移植民社会が20年も経過し、二世の子供たちの教育や、出稼ぎ移民から定着移民へとその思考の変換を遂げようとしていた移植民そのものへのポルトガル語への関心を高めるという観点から、1928年12月21日(第607号)の8面に「NOTAS E INFORMAÇÕES」というポルトガル語の記事が登場するようになった。二世の子供の教育を考慮した『日伯子供新聞』も1939年1月1日から同年5月27日まで週1回、21号まで発刊されている。

(2) 『伯刺西爾時報』

1917年8月31日、伯刺西爾移民組合代理人神谷忠雄の招聘により渡伯した黒石清作によって創刊された¹⁴⁾。神谷は、既に発刊されていた『週刊南米』や『日伯』による移民会社批判に危機感を感じ、北米新聞の記者だった黒石を移民教育部長として呼び寄せたのだ。渡伯時には日本から最新の活字と印刷機械を持ち込み、印刷工を同行させていた。移民会社の協同的結合体であった伯刺西爾移民組合は、サンパウロ州政府との移民契約に基づいて移民を送出した関係上、ブラジル日本移民の教養高揚と倫理道德的人間教育を目指していたので、『時報』には移民の目線を越えた説得調の文体に特徴がある。サンパウロ市コンセリェーロ・フルタード街に社を構え、1年前、金子と『日伯』を立ち上げたばかりで訣別してきた輪湖俊五郎が編集長となっていた。黒石と輪湖の両人はアメリカでの新聞作りの経験を活かし、読み易いルビ付き活字新聞を発刊した。また、移民達にいち早く現地の言葉を理解してほしいとの意図が明確に見られ、伯刺西爾語講座をほぼ1年間連載するなど、斬新なアイデアを盛りこんでいた¹⁵⁾。1917年9月7日の第2号が現存し、その第1面記事には「目的を達する方法は簡易」と題して、

「一旦、農と目的を立てた上は終生この目的の為に努力することを決心し、事業の発展を図らねばならぬ。」と移民たちへのブラジル定着と農業への心構えを説いている。また、主要な一面記事にはそれに関わる写真を紙面中央に掲載するなど、紙面構成に工夫を凝らしていた。

ポルトガル語の導入も他紙に比べて早く、1928年6月22日（第558号）の20面に「O SOLO É A PATRIA, CULTIVALO É ENGRADECÊLA（田園はわが故郷、耕すは国の栄え）」と、移民を啓蒙する記事を掲げている。発刊当初からの4ページ7段組みのルビ付き活字で印刷された紙面と洗練された内容は、当時ブラジル最大の発行部数を誇っていたエスタード紙に「ブラジルにおける活字日本語新聞の嚆矢」と云わせしめる程インパクトを与えていた¹⁶⁾。その要因は、第1回移民以来の日本移民の珈琲園労働者の不定着性という悪評を払拭し、移民送出を推進しようとしていた伯刺西爾移民組合の意図にあったと思われる。しかし、伯刺西爾移民組合の主要2社であった「東洋移民会社」と「南米殖民会社」、その他の移民会社等が1917年12月1日合併し「海外興業株式会社」を創立させた¹⁷⁾。この「海外興業株式会社」は、移民取扱業者と当時の寺内内閣蔵相藤田主計らによって、国策遂行のミッションを持ち、国策移民送出の代行機関としての地位を与えられていた¹⁸⁾。この過程で伯刺西爾移民組合は、その業務一切を海外興業株式会社移民部へ引き継ぎ解散した為、『時報』は以後の発刊に関して「海外興業のお抱え新聞」と誤解されることになったと考えられる。

週1回金曜日に発行していた創刊時の購読料は、年間10ミルと他紙に比べて割安で、見応えがあったことと、第一面は毎回、移民社会への教示を与えるような内容の記事で埋まっていたことなどから、購読者層は安定していたようだ。発行部数も1500部と他紙に比べて多く、移民25周年の1933年には、8200部に達していた。日刊紙への変更は、他紙とほぼ同時の1937年8月23日（第1376号）であった。このことに関しては、『聖報』が以前より該紙に8月23日に日刊紙とすることを公言していたことから、『日伯』共々その波に遅れまいとする競争心の現われがあったと思われる。上から目線の『時報』ではあったが、中央では『日伯』と競合し、地方では『聖報』の発刊を歓迎しつつも牽制する姿勢を取らざるを得なかったといえる。

二世の教育という視点から1934年には子供新聞である『子供の園』を創刊している。1941年の外国語新聞禁止条例により、8月9日（第2550号）をもって休刊せざるを得なくなった¹⁹⁾。第二次世界大戦後の1946年12月21日（第2545号）、8ページ目にはポルトガル語版を挿入して復刊したが、戦後の勝ち組負け組問題の中で、勝ち組系新聞と化したことから、認識派グループからの信頼を逸し、1952年12月18日（第3340号）をもって廃刊となった²⁰⁾。

(3) 『聖州新報』

1921年9月7日、ブラジルの独立記念日に焦点を合わせ、ノロエステ地方の結節点バウルーで創刊されたのが香山六郎を社主とする『聖州新報』であった。香山は『時報』の黒石の好意により、1921年4月29日付『時報』紙上に、4月21日付で以下のような「聖州新報発行予告」を掲載している。

今般バウルー市に於きまして『聖州新報』と呼ぶ邦字週刊新聞を発行致します。鮮明なる振仮名つきの金属版刷であります。

『聖州新報』は私一個の独立経営で何等羈絆に囚はれぬ新聞であります。何者にも媚びず何

物にも惶れず恒に同胞の味方となり相談相手となる新聞であります。同胞の深刻なる実生活に触れ、実際問題の記事を以て満たされ居る処に趣味と実益との旺盛新聞であります。晩くも来五月末頃までには初版を発行致します。其暁は同胞諸兄姉の御愛読御購求を希上げます。

大正十年四月二十一日 バウルー市 聖州新報社 香山六郎
同胞諸兄姉²¹⁾

1921年1月バウルー市に領事館が新設されたことを契機として、在伯日本人の最も多いノロエステから、一個人による独立経営で、同朋の味方となる新聞であるとの発刊宣伝をし、移民の目線を以て、日本語により移民の声をいち早く報道することの重要性を強調した、趣味と実益溢れる新聞であると宣言している²²⁾。

社主の香山六郎は第1回移民船笠戸丸の自由渡航者で、同船者で皇国殖民合資会社サンパウロ駐在代理人であった上塚周平とは同郷の志であった²³⁾。しかも着伯後、香山は上塚の事務補助員として移民業務に携わっていたという縁を持っていた。予告時の「鮮明なる振仮名付つきの金属板刷り」との説明とは裏腹に、創刊当初の印刷技術が石版やジニコ版であった為、インクが紙に染み込んで文字が非常に読みにくいといった欠点があった事と、年間購読料も15ミルと他紙との差もあまりなかった事等から、購読者層を拡大させることは至難の業であった。創刊当初の発行部数は200部、その年の暮れでも270部程度であったが、翌年の発行部数は800部にまで伸び、その内150部程はソロカバナ線沿線の購読者になっていた。現存する最古紙面の第一面には「殖民者の長短」という題で、「吾4万同朋移植者をノロエステ、ソロカバナ、アラクワラ、イグアッペ及マツグロソの6ヶ所に大別し、管見してみる。」との比較地方論が掲載され、「ノロエステ同胞は物質的には優勢を他に誇示しているにかかわらず、言論・思想と云う方面にかけてはイグアッペ殖民者側よりも新しき人間的生命にふれて居らず、時代錯誤



図2 現存する『聖州新報』の最古版：
「殖民者の長短」1923年2月23日付第71号第1面

の伝統的難有屋であり（略）ノロエステ線同胞より資本家は群出して呉れるだろう、併しプロレタリアートの熾烈なる新人間味の士は恐らくノロエステ線よりもイグアッペ植民地より多く群出することであろう。」などとイグアッペの移民とその性格の違いを比較しつつ、「ノロエステ植民者の活動振りにプロレタリアートの思想を抱かせ、ノロエステ線とソロカバナ線の間接地帯の太古林に斧を振るって、そこに吾々の旧道徳・旧習慣に囚われぬ新しき生命ある人間界を建設したい。」と、ノロエステ沿線の将来に夢を膨らませて開拓者になり切った香山の持論が展開されている²⁴⁾。この考えは、聖州新報の将来的希望をも代弁していたものと解釈できる。

1925年5月8日より、中央紙であった他の2社と肩を並べるべく活字印刷となった。創刊後5年、他社の創刊時から約10年遅れの活字印刷導入であった。その際には「在伯同朋は聖州新報を読め！同紙は恒に移民の真の伴侶である」とアピールして、ノロエステ地方唯一の地方紙は『聖報』であることを強調していた²⁵⁾。

さらに同じ活字印刷であるなら、購読料が25ミルの中央紙である『日伯』や『時報』より、購読料は20ミルと他紙より5ミルも安価で、しかも情報を即時に伝達できるとし、3日から1週間遅れで配達される他紙との相違性を明らかにし、「早くて安くて身近な新聞」であることを強調して購読者層拡大に腐心していた。

移民25周年に当たる1933年の発行部数は5300部にも増大し、地方紙としての基盤を確固たるものにしていった。しかし、1930年当初、アリアンサやビリグイに新たな地方紙が創刊されたことや、地方紙に甘んじられない社長の姿勢から、1934年、活動拠点をパウロ市からサンパウロ市に移転し、紙名も“NOTISIAS DE S. PAULO”と改称した²⁶⁾。当時サンパウロ州で日本人などの外国人が新規事業を展開する際には、企業のトップはブラジル人でなければならないという規制があった為、名目上の社長を二世である子供たちに変更せざるを得なくなった²⁷⁾。この点は、『日伯』や『時報』が、創刊当初からサンパウロ市に位置していた事の強みとの相違点であった。ポルトガル語の挿入に関しては、1925年5月8日版（第177号）の第1面に活字印刷になったことを祝して“Progredindo”を掲載したのが最初で、同年12月18日版（第299号）の第1面に、購読者への感謝の言葉を“Aos Leitores”と記している²⁸⁾。しかし、ポルトガル語版を挿入せよとの命令には背けず、1937年8月23日版（第1279号）からの日刊紙への変更時に、改めて「NOTICIAS DE S.PAULO」と第3面に表記し始めた²⁹⁾。1941年には外国語新聞禁止令が発令された事を契機に、「日本人移民の為の日本語新聞」を信条とした香山は、1941年7月30日、自主的に廃刊とした³⁰⁾。現存紙は7月26日（第2235号）までである。この背景には、ブラジルで生活している以上、ブラジルの法規制には従わなければならないという遵法意識の他に、あくまでも日本人である事への精神的固執と移民の目線による新聞であるという道義的意識が優先していた事、更にはポルトガル語版を掲載するには、活字やポルトガル語を解する編集人を新たに雇用しなければならない為、人件費や技術費等の増大といった経済的課題が生じる事への不安があったと思われる。この点は確固たる基盤を形成していた中央紙である『日伯』や『時報』に及ばぬ点であった。1945年8月15日の終戦宣言を聞いた香山は、3日後の18日の晩、自宅裏庭で今まで手元に保管していた全ての新聞を自らの手で焼却処分してしまった³¹⁾。大きな歴史的損失であった。

以上3紙についての概要は以下に記述する。

表2 主要日本語新聞概要

	日伯新聞 Nippak - Shimbun	伯刺西爾時報 NOTÍCIAS DO BRASIL	聖州新報 SEMANARIO DE SÃO PAULO
創刊時期	1916年8月31日 サンパウロ市エルネスト・デ・カストロ街18, 郵函375	1917年8月31日 RUA CONSELHEIRO FURUTADO No.39 C.Postal 1082 SAO PAULO	1921年9月7日 パウルー市ノロエステ街11, 郵函58
社主出身地、渡伯事情	創刊者：2名 金子保三郎（生没不詳） 愛知県，自由渡航者 輪湖俊午郎（1890～1965） 長野県， アメリカからの再移住者（元『ロッキー時報』記者）， 1919年9月より三浦鑿造（1882～1945），高知県，ブラジル海軍練習艦「ベンジャミンコンスタン」号の柔道指導者として着伯。	黒石清作（1870～1961） 福岡県 伯刺西爾移民組合代理人神谷忠雄の招聘により渡伯。 編集長に日伯新聞創刊者の一人であった輪湖俊午郎（1920年迄）	香山六郎（1886～1976） 熊本県 1908年笠戸丸自由渡航者 徴兵忌避による渡伯。
創刊目的	「邦字新聞は、ブラジル邦人に目と口を与えるもの」移民の定住を論じ、植民地開設を説く。三浦時代は「同胞自決」の考えから、サンパウロ市を中心に領事館や日本の情報と都会の移民生活を報道する事に特化。	「ブラジル移民の為の邦字新聞」として、移民の道徳的教化が目的。伯刺西爾移民組合の機関紙的性格を持つ。創刊当初より活字新聞。	日本移民の増加著しいノロエステ地方の要地パウルーで「在伯同胞は聖州新報を読め！同紙は恒に移民生活の真の伴侶である」と日本移民の目線で移民の声をいち早く報道することに特化。ノロエステに根付いた地方紙となる。
現存最古紙面の印刷技術	1924年2月22日版（第361号） 6ページ，7段組み ゲーテンベルク式ルビなし活字印刷（但し創刊時～1919年11月14日迄は石版刷り）	1917年9月7日版（第2号） 4ページ，7段組み ルビ付き活字印刷 1500部	1923年2月23日版（第71号） 4ページ，7段組み 当初は石版からジンコ版（亜鉛版）：手書きの為読解困難 1925年5月8日より活字印刷
現存最古紙面の購読料	1924年2月22日版（第361号）によれば，年間18ミル 前金払い 週1回，金曜日発行	1917年9月7日版（第2号）によれば，年間10ミル 前金払い 週1回，金曜日発行	1923年2月23日版（第71号）によれば，年間15ミル 前金払い 週1回，金曜日発行
現存最古紙面の一面記事	「同朋自決」日本移民が渡伯以来十有七年，移民政策の成績上がらず。移民奨励など政府の眼中にはない。（1924年2月22日）	「目的を達するの方法は簡易」一旦，農と目的を立てた上は終生この目的の為に努力することを決心し，事業の発展を図らねばならぬ。（1917年9月7日）	「殖民者の長短」吾4万同朋移植者をノロエステ，ソロカバナ，アララクワラ，イグアッペ及マツグロソンの6ヶ所に大別し，管見してみる。（1923年2月23日）
1925年購読料	25ミル（1925年1月1日）	25ミル（1925年1月1日）	20ミル（1925年5月8日） 活字版に変更時
発行部数	7000部（1933年） 1936年4月から週3回発行 15000部（1939年当時）	8200部（1933年） 1931年より週2回発行	5300部（1933年）。 1935年12月には10000部。 1935年より週3回発行
日刊紙	1937年8月25日（第1187号）	1937年8月23日（第1376号）	1937年8月23日（第1279号）
ポルトガル語記事導入	1928年12月21日（第607号）8面 [NIPPAKU SHIMBUN] [NOTAS E INFORMAÇÕES]	1928年6月22日（第558号）20面 [O SOLO É A PATRIA, CULTIVO É ENGRANDECÊLA]（田園は我が故郷，耕すは国の栄え）	1925年5月8日（第177号）1面 活字新聞切り替えを祝し，“Progredindo”
廃刊	1939年5月27日（第1716号）	1941年8月9日（第2550号）で一時終刊し，1946年12月21日（第2545号）で復刊。8面目はポ語版。1952年12月18日（第3340号）廃刊。4面目はポ語版。	1941年7月30日，ただし現存の最終版は7月26日付紙（第2235号）。
特記事項	1931年3月26日，三浦鑿社主国外追放。1939年7月，再度三浦鑿国外追放。1931年10月，ノロエステ支社をアラサツバからリンスに移轉。日伯子供新聞（1939年1月1日～5月27日）週1回，21号まで発行。	発刊当初より伯刺西爾語講習録あり。1924年リンス支部開設。1934年9月「子供の園」創刊。	1934年11月13日，サンパウロに本社移転。紙名をNOTÍCIAS DE S. PAULO と改称。創刊905号が聖市第1号となる。

注：新聞社住所は，紙上通りに表記。各新聞，香山六郎『回想録』他より作成

2. 主要日本語新聞総論

(1) 対抗意識が垣間見られる発刊

同じサンパウロ市に拠点を置いていた『日伯』と『時報』は、片や官憲批判系、片や移民組合系とそのカラーを異にしていたこともあり、『日伯』を動的表現紙とするなら『時報』は静的表現紙と対比できるほど、紙面構成上での相違を見せている。『日伯』創刊1年後に『時報』も創刊している点や、輪湖俊午郎が『日伯』を創刊して1年後には『時報』の編集長に収まっている事実からも、その意図的の区別意識あるいは対抗意識を伺うことはできよう。

一方、黒石は1921年9月7日、パウルーに『聖報』が創刊される際、香山六郎からの創刊案内記事の掲載依頼を快諾し『時報』に掲載させていた³²⁾。いずれはライバルになるであろう同業者の創刊記事を、快く掲載させた黒石の思う処は何であったのか。推測の域は出ないが、当時のノロエステ地方では、『日伯』の購読者が『時報』のそれを上回っていたと云われており、「敵の敵は味方である」といった心理であろうか、黒石は新たな対抗馬に創刊支援をした形を取ったと云える。一方、『日伯』創刊者の金子は香山とは親しく、1921年半ばにサンパウロ市で玩具製造をしていた金子は、香山の『聖報』創刊時には技術支援を惜しまなかった。金子は意志半ばにして三浦に『日伯』を完全に売却せざるを得なかったが、新聞づくりへの思い入れが消え去ったわけではなかったのだ。彼は石版よりジンコ版の方がきれいに刷り上がると言っており、エスタード紙のグラビア工場まで案内して香山にジンコ版の購入を勧めている³³⁾。『日伯』も『聖報』も中央紙と地方紙という違いこそあれ、個人的発想による創刊であったことから、香山は三浦の入伯後の生活を批判的に見ていたこともあって三浦とは相容れないものがあつた。三浦の『日伯』にとって『聖報』創刊は、ノロエステ方面の購読者層を失うことに繋がりがねなかったことなどから、従来アラサツバにあったノロエステ支社をリンスへ移転している³⁴⁾。アラサツバ支社時代のターゲットはアリアンサにあつたのだろうが、ノロエステのほぼ中心地リンスに支社を構えたこと云う事は、ノロエステの情報発信の中心地と化していたプロミッソンにターゲットを絞ってきたことを意味する。このような事から総合的に判断すると、『日伯』と『聖報』は「個人対個人」、「中央紙対地方紙」という意識から対抗せざるを得なかつたが、『時報』と『聖報』とは「組織対個人」、「中央紙対地方紙」という意識から表面的には友好的関係を取り繕うことが可能だったと言えよう。

しかし、『時報』は『聖報』の創刊を祝福してはいるものの、素人の創刊による200部足らずの手書きの新聞であつたことから、『時報』はその成り行きを伺って安穩としていたようだ。ところが、創刊2年目で『聖報』購読者が800人を超えると危機感を覚えたのか、1924年にはノロエステ地方のリンスにリンス支部を開設し、俊敏なる情報の発掘に意を注ぐようになった³⁵⁾。1924年当時のノロエステの日本人人口は、3705家族19188人、地主1131人であつたことから、全ての家族が新聞を購読したとして3705部がノロエステの日本語新聞の許容数であつたはずで、すでに『聖報』が650部程販売していることからして、残りを『日伯』と『時報』で折半したとしてもそれぞれ1500部程度にしかならない。とはいえ中央紙である2社の発行部数の3分の1以上を占めるノロエステの潜在的購読者数は、2社にとって経営上不可欠で重要なターゲットであつた。『時報』が1928年1月から第4面に「ノロエステ欄」を設けている点にも、ノロエステ重視の姿勢を見て取ることができよう。

『日伯』と『時報』の対立の極限にあった事象は、『日伯』社主三浦鑿の国外追放事件であった。三浦の公人・私人を問わぬ常軌を逸した報道を、真っ向から非難したのが『時報』社主黒石であったのだ。1929年5月3日に発生した「日伯新聞事件」に関する社主三浦の言動が、ブラジル各紙にまで反響を及ぼし、これが契機となって三浦排除運動が拡散していったようだ³⁶⁾。二度に亘った三浦の国外追放事件は、黒石と日本官憲による徹底した三浦排除策であったのだ。1931年2月5日付『時報』には、

サンパウロ市は、位置と云い、気候と云い、生活状態と云い、何一つ非難の打ちどころがない。故に若し此の地に、日伯新聞がなく、三浦鑿と高岡専太郎とが居なかったら、どれ程良いだろうとは（略）何人も等しく感ずる処だろう³⁷⁾。

とあり、徹底した三浦非難・排除を訴えていることがわかる。ところが『聖報』社主香山は、1931年の第一次国外追放時には、周囲の空気を読んで、同業社主としてではなく古き友人として三浦追放解除請願書にサインしていたという³⁸⁾。紙上では激論を交わしても、一個人としては「同行相哀れむ」の感があったようだ。

(2) 移民の目線との関わり

新聞編集に関して、『日伯』は創刊当初より「新聞はブラジル邦人に目と手を与えるもの」と言い切って新聞発行の企画を進め、移民の目線より上部から定住を唱え、植民地開設の促進を説いていた³⁹⁾。この考えは、三浦鑿に経営権が移譲された後も受け継がれ、三浦は社説「同胞自決」の中で、日本移民が渡伯以来17年経とうとしている現在に於ても、母国政府の移民政策の成績は上がらない。ブラジルへの移民奨励策など政府の眼中にはないのだと辛辣に母国政府を批判し、目先の収益に翻弄され単なる出稼ぎ意識から脱却しない初期移民達に、ブラジルへ定着する為の農業生産計画を志すことを促している⁴⁰⁾。この考え方は、ノロエステ地方に集住し始めていた日本人移民に、独立自営農としての着実な道を選択する際の指標となったと思われる。

一方、『時報』は、伯刺西爾移民組合の新聞として創刊されていた関係もあり、移民の生活の質の向上を目論む意図が強く、「ブラジル移民の為の邦字新聞」としての使命感から創刊初期より伯刺西爾語講習案内をしたり、二世教育問題や衛生問題などを常に掲載し、移民にブラジル社会で生きるための示唆を与えていた点に、上から目線の証を見ることができる。

『聖報』は、ノロエステに創刊した経緯から、地元紙であることを全面に押し出し、平易な言い回しで地域社会の中の日常的出来事（結婚、誕生、死亡、開・閉店）やノロエステを中心とした請願運動の先鋒を切るなど、常に身近な問題を速やかに移民の目線で掲載するコミュニティ紙に徹することに努めていた。例えば、1924年～25年に発生したコーヒー早害の際、プロミッソンの上塚周平達による「珈琲早害被救済低利子貸付金問題」の帝国政府への請願運動時には、地元紙の強みを存分に発揮した情報と活動経過を頻繁に紙上に掲載し、中央紙である『日伯』や『時報』社の反論には、より具体的に対応・報道することで、ノロエステ独立自営農民の結束を達成させていた。香山自身の生活と密着していた事もあり、この移民の目線での論説が目

線の高かった他紙との相違を明確にし、購読者層を増大させていたともいえる⁴¹⁾。

IV 新聞の目指したものとその影響

1. 新聞の構成内容から見えるもの

1923年6月～8月にかけてパウロ市には、従来の週刊誌を日刊紙にした外字新聞

“Correio de Baulu”と“O Bauru o Tempo”が創設されたばかりであった⁴²⁾。1917年当時、ブラジル最大の新聞社であったエスタード紙は、その8月の発行部数1,604,995部。うちサンパウロ市内552,150部、田舎方面268,789部。一日平均約5,300部という数字を示しており、日本語新聞とは比較にならない規模を誇っていた。

これら外字新聞と比較して、パウロ市には1920年代中頃、既に販路を拡大していた日本語新聞が3紙を下らなかったと云う事は、関東大震災直後の1924年以降における日本人移民の増加とノロエステ地方への日本人移民の集住が大きく関わっていたと考えられる⁴³⁾。それ程ノロエステ在住の日本人移民達が日本語そのものと日本語で発信される情報に飢えていたばかりでなく、新聞を通して日本的な発想の構築と維持を願い、新聞により親しみ、そこから得られるさまざまな情報や情操の涵養を望んでいた証であったと思われる。

創刊当初の新聞は、概ね週1回発刊され、そのページ数2～6ページであった。新年、紀元節や天長節、皇室関係慶弔儀、自社の創立記念日等、特別な行事の際には紙面数が40ページに及ぶこともあった。この大部分は広告で占められていた。通常の紙上で特に目立っていたのが、発展の勢い著しかったノロエステ地方らしく、土地の売買広告が広告スペースの半分以上を占めていたことである。農業生産の拡大と独立自営農民としての飽くなき土地所有願望を把握した上での広告であった。また、これらの広告を通して、広告内容の掲載地域や広告掲載者・団体等見ることで、その新聞の流通範囲も概観できるものであった。一方、広告料は各新聞社にとって購読料とともに重要な収入源であったことは明白である。土地売買広告は1924年当時が出現度は高かった。珈琲旱害が発生する以前の土地売買ブームを反映したもので、『日伯』、『時報』にも頻出していたが、『聖報』の場合、ノロエステ地方の同一広告を20数回に亘って掲載していた売買人もいる程であった⁴⁴⁾。

紙面構成は、3社ともほぼ共通し、第1面に社説もしくは論説文、時局ニュース等を掲載していた。2面目には、内外通信、特に日本との通信事項、経済情報。3面目には、移民社会関連ニュース、例えば、日本人会の結成、日本語学校建設、各地の動き紹介。4面目は文化欄で、衛生問題や相撲、陸上競技大会、運動会といったスポーツ関連記事、文芸活動に割いていた。短歌、俳句、創作詩、連載小説、読者登壇など労働に疲れた人々の精神涵養を促し、購読意欲を掻き立てる工夫も凝らされていた。これらの記事を通して、日本国内に見られた村落共同体的文化活動がブラジル日本人移民社会にも踏襲されていたことがわかる。

2. 販路拡大から見えてくるもの

新聞の販路拡大はどのようになされていたのであろうか。『聖報』を中心に明らかにしたい。サンパウロ市からノロエステ地方に送付されてくる新聞は、パウリスタ線、ソロカバナ線でバ

ウルーまで運搬されてくる。パウルー以遠の地にはさらに鉄道で運搬されて行く。パウルー近在の日本人集住地には、駅前の旅館やホテル、雑貨店、日本人会や青年会など、日本人が集まる施設が取次店となり、私書箱（郵函、Caixa Postal）が設置されていた。植民地内の場合は世話役の家などを取次所とするのが通例であった。所用で集住地に駄馬や徒歩などで出かけてくる人々が、自宅近くの住民達の新聞や郵便物等を纏めて持ち帰り、途中該当者に届けて行く。特別な新聞配達員がいた訳ではなかった。そこには信頼と相互扶助の精神に支えられた日本の村落共同体的活動が存在していた。

パウルーで発行されている『聖報』であっても、遠隔地のソロカバナ線プレジジョン耕地に届く迄に3日間程は要する。ところが、サンパウロから輸送されてくる『日伯』や『時報』は、発送からパウルー駅到着までに2日～3日、遠隔地の住民に届く迄に1週間近く要することになり、新聞が情報の伝達手段であるとはいっても瞬時性は欠かざるを得なかった。ブラジルの住所表記に「Caixa Postal（私書箱、郵函）」とか「Rua ××, km △△（××道路△△km）」というのがあるのも、住民の居場所を合理的に示す為の一方策だったのである。

『聖報』がパウルーに創刊したのは、パウルー領事館が近在することで、日本国内外を問わずニュースをいち早く受信できるだけでなく、ノロエステのハブであった利点から地元のニュースも即刻住民に届けられるという、情報の受・発信地としての立地条件を最優先し、情報の提供者であると同時に需要者であるという双方向性理解を可能にした事、社主である香山自身が、開拓の実体験者であった事から、迅速公正な情報伝達の重要性を心得ていたからであった。

時に情報収集は、新聞社員の奥地巡回時に実施された。巡回者である社員の役割は、旅館やホテルのない奥地の巡回先で移民の家に宿泊させて頂きつつ、購読料金の回収作業、新規購読者の勧誘・獲得、パウルーやサンパウロなど都会の情報、時には日本や世界の情勢などを伝達することが主ではあったが、逆に奥地の情報を収集する絶好の機会でもあった。したがって社員が奥地巡回に出る際、新聞社は「社告」を掲載し、巡回先での宿泊所確保を兼ねた依頼をしていた。該当地域の住民、特にその地域の世話役の家では巡回者の訪問を待ち望み、心からのもてなしをすることで新聞社及巡回員へのねぎらいと協力の姿勢を示したのであった。情報の提供者と享受者が一体となることで、情報の相乗効果が期待されたのである。この情報の相乗効果は、新聞のみならず各社の刊行した各種年鑑等にも凝縮されていた⁴⁵⁾。これ等年鑑類は、現在もブラジル移民研究の貴重な史料として活用されている。

V おわりに

移民としての人の国際移動の基本は、その理由の如何を問わず個人の意志に起因する。移民先における情報収集の難しかった初期移民たちは、その媒体としてのメディアの存在を願った。一方、メディアの創造者たちは、情報に飢えていた移民たちに、時には政論紙として、また時にはコミュニティ紙として情報を瞬時に正確公平に、時として隠蔽性・誇張等の要素を加味して提供することで、移民達に新しい人間関係により構築された村落共同体的日本人移民社会への定着と発展・繁栄を願い、広範なノロエステ地方内の個々の社会を結ぶメディアネットそのものを構築した。購読者層の拡大と新聞各社の経済的基盤確立は同時並行的に進行していたの

である。特に視座とした『聖報』は、地元の問題を最重要テーマとして常に報道することで、購読者との親近感を増し、信頼感を深化させてこの両者を達成していた。

この観点から『聖報』はノロエステと共に成長発展したといえる。単なるメディアの伝達手段から地域密着型地方紙としての基盤を確立させたばかりでなく、ノロエステ日本人移民社会の情報の要として、生産活動における共同化の重要性を認識させ、各種産業組合の基を築く示唆を与えていた。この事は、1924年、ノロエステ地方に発生した「請願運動」に如実に現れている⁴⁶⁾。この結果、該社会の独立自営農民たちを中心とした移民たちは結束することの重要性を体験し、戦前のノロエステ地方の大発展を促し、其の後の農業生産活動における日本人移民のブラジル社会における評価を高めて行ったのである。

注

- 1) サンパウロ人文科学研究所『伯刺西爾日本移民・日系社会史年表』（サンパウロ人文科学研究所、1996年）：88頁によれば、日本からのブラジル向けラジオ放送が開始されたのは、1938年11月からである。以後「サンパウロ人文科学研究所」を「サンパウロ人文研」と略記す。
- 2) 日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカー移民文学・出版文化・収容所』（新曜社、2014年）：70 - 71頁。
- 3) 外務省通商局「外国人農場所有状況」『通商公報』第41巻、第1050号（1923年）、（不二出版、1997年）：42頁。
- 4) 「雑信」『聖州新報』第90号（1923年7月6日付）：1頁。以後『聖州新報』を『聖報』と略記す。
- 5) 南亜米利加通商局長赤松氏談話「南亜米利加諸国日本移民」外務省外交史料館『別冊伯国部 本邦移民ニ関スル外国官民ノ言動並新聞論調』外務省外交史料3門8類2項、285-5-5号。（移民課公第21号、1992年）
- 6) 香山六郎「サンパウロ州北西部日本人発展統計表」『のろえすて日本人年鑑』（聖報社、1928年）：見開き。
- 7) 聖報社「各線別統計表」『在伯日本人移植民25周年記念鑑』（聖報社、1933年）：見開き。
- 8) 清谷益次「新聞は移民にとっての何であったか」サンパウロ人文研『人文研』第2巻（同人文研1998年）：3頁。
- 9) 以後文脈上可能な限り『日伯新聞』は『日伯』、『伯刺西爾時報』は『時報』と略記す。
- 10) サンパウロ人文研『ブラジル日本移民・日系社会史年表』（同人文研、1996年）：66頁、70頁によれば、『アリアンサ時報』：1930年4月9日創刊。創刊者は力行会アリアンサ支部宮尾厚。編集長は中川権三郎。1937年5月12日、ノロエステ線アラサツバ市に移転し『日伯協同新聞』と改称。1945年5月の発行部数は5500部。『北西民報』：1932年6月25日、ピリグイ中央青年連盟の機関紙としてピリグイで創刊。創刊当初は『ピリグイ民報』と称した。1933年末、同連盟の解散に伴って廃刊となり、1934年梶本明によって再刊され『北西民報』と改称。1938年、本社をリンスに移転。発行部数4500部。尚、ブラジルでは「北西」を「ノロエステ」と呼ぶため『ノロエステ民報』と記述されることが多い。
- 11) 1890 - 1965年、長野県出身、1906年、英文学研究の為に渡米、『ロッキー時報』記者、1913年、カリフォルニア州議会で排日法案が通過したことに憤慨し、ブラジルに再移住。1916年、金子保三郎と共に『日伯』を創刊したが、意見の相違により退社。翌1917年、黒石清作による『時報』創刊時に編集長として参加したが、1921年退社。パウリスタ新聞『日本ブラジル交流人名事典』（五月書房、1996年）：282頁。
- 12) 香山六郎『回想録』（サンパウロ人文研、1976年）：320頁
- 13) 戸籍上の姓名は三浦鑿造、通称三浦鑿。1882 - 1945年、高知県出身。前掲11『日本ブラジル交流事典』：235頁。

- 14) 前掲11)『日本ブラジル交流人名事典』:81頁及び巻島得寿『日本移民概史』(海外興業株式会社, 1937年):52頁によれば, 神谷忠雄(1880-1951年)東京都生まれ。東洋移民会社社員。1910年, サンパウロ州政府と移民契約を結び, 1912年東洋移民会社第1回移民1412人を送る。1914年, サンパウロ州政府による日本移民への補助金打ち切りにより, 移民渡航が一時中断となったことを受け, 1916年, ブラジル移民に関する「伯刺西爾移民組合」を「南米殖民法社」, 「東洋移民会社」, 「森岡移民会社」三社合同で結成した。神谷はその代表者としてサンパウロ州政府と移民交渉に当り, 州政府の移民導入権限を与えられていたアントウネス・ドス・サントス社との契約を締結し, 移民復活を成し遂げた。「伯刺西爾移民組合」は, 法人組織ではなく, 三社の共同的結合にすぎなかった。1917年10月, 「東洋移民会社」と「南米殖民法社」の合併に因り「海外興業株式会社」が創立すると, 神谷はその役員となった。外務省『移民取扱関係雑件』A門3類8項2目300-1号, 1917年)
- 15) 「社告」『時報』第3号(1917年9月14日付):第5面。内容は「10月5日発行の本紙より伯刺西爾語講習欄を設け語学の通信教授を開始するので, この際(新聞の)購読申し込みをしていただきたい」というものであった。講習欄は1918年12月13日まで掲載された。
- 16) 「エスタード紙上の伯刺西爾時報」『時報』第3号(1917年9月14日付):第5面。ここには「伯刺西爾時報の発刊を伯国に於ける活字日本新聞の嚆矢と推賞し, その主宰者を黒石清作と告げ, (略)」と記載されている。なお, 同頁に「伯国最大新聞の発行紙数」と称してエスタード紙の8月の発行高が表示されている。それによれば, 発行総高:1,604,995部, 内訳, サンパウロ市内:552,150部, 田舎方面:268,789部, 一日平均発行高:約53,000部となっている。日本語新聞の規模とは全く比較にならないことは一目瞭然であった。
- 17) 『時報』第171号(1921年1月14日付):第5面。前掲17:同号同面。
- 18) 前掲14)『日本移民概史』:53-54頁。前掲17:同号同面。
- 19) 外務省「各国ニ於ケル新聞・雑誌取締関係雑件 伯国ノ部 外字紙禁止問題」『外務省記録目録戦前期第2巻』:A門3類5項6-16号, 石射大使より松岡外務大臣宛書簡第178号-1(1941年)。
- 20) 新聞の発刊号数は, 時として前後することがある。この記事にもそれが伺えるが, 記事通りとした。
- 21) 「聖州新報発行予告」『時報』第186号(1921年4月29日付):第2面。
- 22) 「在伯同胞は聖州新報を読み!」『聖報』第177号(1925年5月8日付):第3面。
- 23) 前掲11)『日本ブラジル交流人名事典』:43頁によれば, 上塚周平:1876年7月~1935年7月。熊本県下益城郡杉上村赤見出身。熊本済々黌校, 旧制第五高等学校, 東京帝国大学法科卒業。法学士。1908年皇国殖民合資会社第1回移民船笠戸丸の輸送監督, サンパウロ駐在代理人として渡伯。同会社では香山六郎の上司とある。
- 24) 「殖民者の長短」『聖報』第71号(1923年2月23日付):第1面。
- 25) 前掲22)には, 「在伯同胞は聖州新報を読み! 同紙は恒に移殖民生活の真の伴侶である」と記されている。
- 26) 前掲10)『ブラジル日本移民・日系社会史年表』:66頁, 70頁によれば, アリアンサに『アリアンサ時報』(1930年, 社長 宮尾厚)が, ビリグイに『北西民報』(1934年, 社主 梶本明)等が創刊された。
- 27) 第一面には1934年11月13日, サンパウロ市タバチンゲイラ街96番地, 郵便2765に本社移転。創刊905号(聖市第1号), Diretor: Dario.P.Almeida, Proprietário: Rocro Kowyamaの記載がある。Dario.P.Almeidaは, 香山の三女静子の夫にあたるブラジル人。
- 28) 「Aos Leitores」『聖報』第299号(1925年12月18日付):第1面。
O“Semanao de São Paulo” deixará de circular próxima semana, a fim de ressurgir em 1° de janeiro vindouro com uma edição maior. Por isso, saudando desde já a entrada do novo ano.O “Semanao de São Paulo” agradecendo, despede de seus prezados leitores de 1925.
「購読者の皆様へ」
『聖州新報』は来週休刊し, 来年1月元旦に増補版を発刊いたします。茲に1925年に賜りました読者

の皆様方の御厚意に対し衷心より厚く御礼申し上げ、新年のご多幸をお祈り致しております。

- 29) 外務省「各国ニ於ケル新聞・雑誌取締関係雜件 伯国ノ部 外字紙禁止問題」『外務省記録目録戦前期第2巻』:A門3類5項6-16号。桑島大使より有田外務大臣宛書簡第133号(1939年)。それによれば、「外国ノ新聞其ノ他刊行物ハ今後ハ総テ解釈付ニアラサレハ発行不可能トナレル次第ニテ一般外字新聞殊ニ邦字紙ハ今後其ノ経営上多大ノ支障ヲ来スヘキモノト認メラル(略)」とある。
- 30) 前掲27)「石射大使より豊田外務大臣宛書簡,第314号の2」(1941年)。その中に「(聖州新報ハ廃刊,南米新報ハ休刊ヲ偽装セリ)ニ対シテ,其ノ可能性ノ範囲内ニテ8月31日以後葡語版ヲ発行シ得ル様準備方申聞ケ置キタルカ邦字版廃止後ニ於ケル在留民ニ対スル報道方法ニ対シテハ研究中ナリ」とある。
- 31) 前掲12)『回想録』:327頁では無条件降伏の3日後,398頁では翌夜と書かれており信憑性に欠ける。
- 32) 「聖州新報発刊予告」『時報』第187号(1921年5月6日付):第3面。
- 33) 前掲12)『回想録』:320-321頁。
- 34) 「社告 従来アラサツーバ町に在ったノロエステ支社は,此度リンス町オズワルド・クルス街へ移転しました。』『日伯』第749号(1931年10月8日付):第7面。
- 35) 「社告 リンス支部開設」『時報』第349号(1924年6月20日付):第7面。
- 36) 「葡字新聞に現れた日伯事件」『時報』第602号(1929年5月3日付):第1面。1929年4月10日に発生した日伯社破壊事件に端を發した三浦の言動に対するブラジル各紙の論評を掲げ,三浦の排除に動き出したもの。
- 37) 「社会廓清の劈頭三浦処分を提唱」『時報』第693号(1931年2月5日付):第1面。
- 38) 前掲12)『回想録』:362-364頁。
- 39) 前掲11)『日本ブラジル交流人名事典』:79頁。
- 40) 「同胞自決」『日伯』第361号(1924年2月22日付):第1面。
- 41) 「珈琲旱害被救済低利子貸付金問題」に関しては,85万円の貸付金の配分等をめぐって,主要新聞は,その経過から賛否両論まで購読者も含めて紙上論戦を展開していた。
- 42) 『聖報』第89号(1923年6月29日付):第3面及び第98号(1923年8月31日付):第3面。“Correio de Bault”の主宰はマノエル・サンデン氏。現在輪転機購入準備中と記事にあり。
- 43) 拓務大臣官房文書課「拓務省統計概要」第3回(1932年):23頁によれば,1924年から1930年にかけて,ブラジル本邦人渡航者員数は,6.9万人を上回った。
- 44) 『聖報』第110号(1925年5月8日付)-第209号(1925年12月18日付)までに,ノロエステ線ペンナポリスの国崎重次は土地売買広告を29回掲載している。
- 45) その成果は,香山六郎『のろえすて日本人年鑑』(聖報社,1928年),時報社『伯刺西爾年鑑』(同社,1933年),香山六郎『在伯日本移殖民25周年紀念鑑』(聖報社,1934年)等として刊行されている。
- 46) 1924年末のノロエステに発生した珈琲旱害により,困窮した独立自営農民たちが,上塚周平の提唱した「請願運動」に賛同し,当時の田付七太在ブラジル特命全權大使を動かし,「珈琲旱害被救済低利資金」85万円を帝国政府から拠出させることに成功した事例。所謂「八五低資」問題。帝国政府がブラジル農業移民に対して救済資金を貸し出した唯一の事例であった。

